

—エッセイ—

## ブーツ・ブックラバーズ・ライブラリー (UK) に「逃避」した女性たち

泉 順子\*

イギリスの大手老舗ドラッグストアのブーツ (Boots) が、かつて会員制の貸本屋を全国に展開し、大きな成功を収めていたという史実はさほど知られていない。

イギリス中心部の都市であるノッティンガムで創業されたブーツは、二代目のジェシー・ブーツ (Jesse Boot) とその妻フローレンス (Florence) によって会員制の貸本屋「ブーツ・ブックラバーズ・ライブラリー (Boots Book-Lovers' Library、以下ブーツ・ライブラリー)」を 19 世紀末にオープンした<sup>(1)</sup>。このブーツ・ライブラリーは当時イギリスで流行っていた circulating library のひとつである。料金を取って本を貸し出すビジネスのことだが、ブーツ・ライブラリーは次々と革新を加え、この事業に成功した。

1960 年代に幕を閉じるまで、ブーツ・ライブラリーは全国各地につくられ、多くの会員に利用された。最盛期の会員数は 100 万を超え、毎年およそ 125 万冊もの図書がブーツ・ライブラリーによって購入されていた<sup>(2)</sup>。その勢力は、出版業界にも大きな影響力を及ぼしていたといわれている。

---

\*いずみ・よりこ／明治大学商学部教授

(1) Wilson, Nicola. "Boots Book-lovers' Library and the Novel: The Impact of a Circulating Library Market on Twentieth-Century Fiction." *Information & Culture* Vol. 49 (4) (2014): 427-449. 429.

イギリスでは 19 世紀に無料の公共図書館が開かれたが、その設置の是非をめぐり喧々諤々の議論が交わされた。当時の様子はマシュー・バトルズの『図書館の興亡』に興味深く描かれている<sup>(3)</sup>。知識を無駄につけてしまった労働者階級は急進的になって革命を起こしかねないと懸念する声がある一方で、むしろ教養を身に着ければ思慮分別をもつようになり、愚かな行動に走らなくなるだろうという見解もあった。いずれにしても公共図書館の開設は労働者階級の教育普及を主眼としていたので、館内の棚に並ぶ本にはおのずと実用的で、教育的なもの、社会の一員として役立つような実用書が優先的に選ばれていた。

まだ紙の値段が高い時代にあって書籍は財産のひとつだった。ナショナル・トラストに指定されているケンブリッジシャー最大のマナーハウス、ウィンポール・エステートには息を呑むような壮麗なライブラリーがあるが、ここはかつてジョナサン・スウィフトをはじめ、知識人や芸術家たちが集うサロンであった。いま訪れてみても、雅な広間を埋め尽くす膨大な書籍と細やかな装飾があしらわれた美しい本棚からは、家主の教養の深さだけでなく、その財力も容易に想像できる。

19 世紀には貸本屋も次々と誕生し、読書を楽しめるほどのリテラシーを備え、生活にもそこそこの余裕があり、教養もあるけれども、書籍を十分には買えず、活字に飢えているような人々に喜ばれた。上流階級を対象にしたハロッズ・ライブラリー、大衆向けの W・H・スミス、そしてどちらかというとインテリに好まれたミューディーなどが大手の貸本屋として有名だったが、どこよりも息が長く、しかも上流から中流階級の女性たちという客層から厚い支持を得ていたのがブーツ・ライブラリーだった。

このエッセイでは、ブーツ・ライブラリーが女性たちに愛された理由を探るために、「逃避」という観点から綴ってみたい。

---

(2) Winter, Jackie. *Lipsticks and Library Books: The Story of Boots Booklovers Library*. Dorset: Chantries Press, 2016, 13.

(3) マシュー・バトルズ『図書館の興亡』白須英子訳、草思社、2004 年、第 5 章。

## 「パーソナル・タッチ」のカスタマーサービス

品質と心地よさにこだわった経営者のフローレンスは、ひとりひとりの会員に気を配る「パーソナル・タッチ」のもてなしをビジョンに掲げ、会員の婦女たちが喜び、安心してくつろげるようなサービスを次々と展開した。

そんなブーツ・ライブラリーの特色としてまず挙げられるのは、外観と内装のデザインだ。各地域の伝統や特徴を存分に意識して設計された外観と上品で優美な室内装飾と陶磁器が利用者の目を引いた。ライブラリーのそばには喫茶室が設けられ、会員は紅茶やコーヒーを片手に、お菓子をつまみながら、借りた本を広げることができた。

さらには、ドラッグストアとしての知名度を活かして、ブーツ・ライブラリーは収蔵されている図書が「除菌済」であることを宣伝した。不潔な労働者階級が多く利用する公共図書館の蔵書は黴菌が付着していて、図書館は病気の温床だという風評が絶えなかったからである。この時代、夫や子供たちが読む本を探してくるのは妻たちの役目でもあったので、会員の大半が女性で占められていたブーツが衛生面でも配慮を見せたのは賢明な戦略であったと評価できる。

「パーソナル・タッチ」のサービスを追求するブーツ・ライブラリーでは、会員の名前と顔だけでなく、各会員の趣向や好みのジャンルも把握されていた。当時の貸本屋業界で一位、二位を争うほどの有能な司書を迎え入れ、選書に迷う会員には個人的なアドバイスもあった。国外に住む会員には宅配サービスも用意されていた<sup>(4)</sup>。またブーツは開架式を導入した。このため会員は本をじかに取り、その本の感触をつかめるだけでなく、同じジャンルの前にたつ他の会員たちと情報交換やたわいもない世間話を楽しめた。地域密着型のライブラリーとして会員同士の絆を育む場にもなっていたのである。

このように会員のニーズに確かな解決策を提供するサービスが、このラ

---

(4) Winter 17.

イブラリーの長期継続につながったことはいうまでもない。第二次世界大戦中にはブーツ・ライブラリーの数 は 460 にまで伸びていた<sup>(5)</sup>。会員は二つのクラス (A, B) に分かれ、A クラス会員は年会費 17 シリング 6 ペニーを支払うことで本を自由に選択できた。B クラス会員の年会費は 10 シリング 6 ペニーで、刊行後 1 年経過した本であれば貸し出し可能となっていた<sup>(6)</sup>。ブーツ・ライブラリーの会員には女優・歌手のアニタ・ハリス、男優のケリー・グラント、スチュワート・グレンジャーといった有名人も少なからずいたという<sup>(7)</sup>。

新しいことを積極的に取り入れ、サービス精神にあふれる人柄のフロレンスはテーブルクロス、ティーカップ、家具の品質から照明の具合に至るまで細やかな心配りをみせた。上流から中流階級の婦女たちの束の間の逃避の空間にふさわしくあるように、あらゆる表現要素に統一と調和を与えられ、生活感が微塵も漂うことのないようなライブラリーを提供したのである。そのおかげで会員の婦女たちは、あらゆることから一瞬遠ざかり、家庭では得られない静かな時空間のなかでひとりの「読者」として過ごすことができたのだ。

## サブジャンルの容認

ところで、イギリスの作家ジョージ・オーウェルの『空気を求めて』(*Coming up for Air*, 1939) という小説では、読書好きの主人公がみずから「ブーツの会員みたい」と表現するくだりがある。この小説が出版された当時の読者にしてみれば、なんとなくしっくりこない、違和感を感じてしまうような表現だったのではないだろうか。というのも、『空気を求めて』の主人公は、妻や子供たちから見放された、風貌もさえない中年の保険営業マンであり、ブーツ・ライブラリーでよく見かけるような上品な婦

---

(5) Winter 125.

(6) Dugan, Sally. "Boots Book-Lover's Library: Domesticating the Exotic and Building Provincial Literary Taste." Ed. Nicola Wilson. *The Book World: Selling and Distributing British Literature, 1900-1940*. Leiden: Brill, 2016. 153-170. 161.

(7) Winter 35.

女ではないのだ。この男性がミューディーでもW・H・スミスでもなく「ブーツの会員」でなければならないのは、革新的なブーツが積極的に購入したジャンルの本が背景にあったと思われる。

公共図書館が実利的な本を優先し、ミューディーのようなどちらかというとインテリ向けの貸本屋が科学書や文芸書をメインに据えたのに対し、ブーツには小説、しかも「ライト・フィクション」と呼ばれるジャンルの本が並べられていた。つまり、哲学的な要素もなく、手軽に読めて、娯楽目的とみなされるような「軽い」読み物が収められていたのだ。

まだ小説というジャンルもまともに評価されていなかったような頃に、サブジャンルの作品をたくさん買い揃えるという経営方針は衝撃的だったのではないと思われる。しかもブーツ・ライブラリーには当代一流のインテリ司書が控えていたのだ。謎解きと犯人捜しに夢中になったり、白馬の王子との夢のようなロマンスに思いを馳せるような趣味は、インテリの読者からは冷ややかな視線を向けられ、眉をひそめられるような時代であり、女流作家のヴァージニア・ウルフは日記のなかで「面白い読み物」をせがむ婦女たちのことを「いまだかつて見たこともないような、もっと軽蔑すべき生き物たちの群れ」と辛らつに表している<sup>(8)</sup>。こうした誹謗中傷があっても、博学な知識と深い教養で培われたブーツの司書たちは、どうにか折り合いをつけながら会員の希望を反映させることに努めた。その棚にはドロシー・セイヤーズ、アガサ・クリスティー、ニュージーランド出身のナイオ・マッシュラの推理小説、バーバラ・カートランドのロマンス、「ファミリー・ストーリー」と呼ばれる小説群、育児書、児童向けの絵本や童話などが多く取り揃えられていた<sup>(9)</sup>。

「ブーツの会員」というバッジは、身に着けるには多少の勇気がいるものだったのかもしれないが、同時にそれは新しい読書の時代を象徴する印でもあった。オーウェルの主人公は、婦女たちのなかに紛れ込みながら、ブーツ・ライブラリーに通う。その期待と胸の高鳴りは、背後に忍び寄る戦争という現実と対照的に描かれ、ブーツ・ライブラリーは一種の要塞として

---

(8) Winter 10.

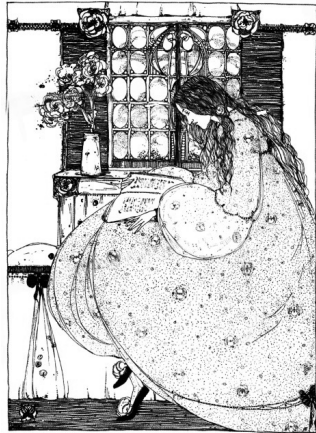
(9) Winter 96-100.

揺れる中年男性の心を守り続けていた。

## 本の世界への逃避

ところで、ブーツ・ライブラリーが上流から中流階級の婦女たちに親しまれていた要因を、歴史的・社会的文脈の中で検討してみることも必要だろう。18世紀の「読書革命」によって読者が主体的に、ひとりひとりの孤独の時間を楽しみつつ、読書を通じて内観し、みずからを開拓することが可能になると、「女性読者」を題材にした絵画が次々と生まれた。これは読書という行為の主体、読書という行為に込められた願いや意味に新たな要素が加わったことを表している。

絵には様々な女性読者が登場する。本を片手に、台所の片隅に座る女性。私たちに背を向けながら窓に向かって読書する女性。恋人や子供と戯れながらも、本のページに視線を向ける女性。こうした作品に共通に読み取れるのは、「いま・ここ」にない彼女たちのこころだ。その一例となる右の絵は、スコットランドのイラストレーターであるジェシー・マリオン・キングの『マジック・グラマー』(1900)である<sup>(10)</sup>。アール・ヌーヴォーの時代に描かれたこの作品



からは、日常生活に施された美的要素だけでなく、一冊の書物もまた「魔術」のような力をもっていることが伝わってくる。熱心に読み込む若い女性の強い視線を見ていると、この女性の想像力が魔術となり、次々と現実世界のものを違うもの（匂いたつ薔薇の花々）へと変身させているように感じ取れる。

日々の生活に疲れ、気分転換をはかりたいときにも、ひとは本を手にし、

(10) Bollmann, Stefan. *Women Who Read Are Dangerous*. New York: Abbeville Press Publishers, 2016. 108.

つかの間の逸脱を楽しむ。アルベルト・マンゲルの言葉を借りれば、「さまざまな不安の恐怖のなかで、喪失や変化に脅かされ、内憂外患の苦勞を背負い、ささやかな慰めさえ得られないとき、本を読む人びとは、少なくとも、すぐそこに安全な場所があると知っている。現実の紙とインクが支えになって、私たちに屋根と安息を与えてくれる」のだ<sup>(11)</sup>。

ところで、これまで何度か「逃避」という表現が出てきたが、読書が叶える逃避はいわゆる「現実逃避」や「逃避行」とは言い切れない要素を含んでいる。目の前の困難な状況から意図的に目をそむけて不安な気持ちを認めないようにすると、世間の目を避けてあてもなく移り歩くというような行為の根底に社会との関わりを否定する気持ちがあるのだとすれば、読書による「逃避」はむしろその逆だといえるだろう。もちろん、読書を通じて描かれる世界に逃げることは可能であり、逸脱を楽しむことも悪いことではない。けれども、読書の機能でもっと重要なのは、この逃避では読者は必ず元の場所に戻るという循環または往復を体験するということだ。

ビブリオセラピー（図書を補助的手段として用いる療法）では読書の世界とこちらの世界の往還が、精神のバランスを保つのに有効であると考えられている。これは古代ギリシアの哲学者アリストテレスのカタルシス論が下敷きになっている<sup>(12)</sup>。悲劇の与える恐れや憐みの情緒を味わった観客が日頃鬱積していた感情を放出し、心を軽快にさせる体験をカタルシス（感情の浄化）という。読み聞かせの大家でもある児童文学者の村中李衣は「現実世界へ戻ってくる、という体験の重要性とともに、戻ってきたこの“場”の発見の意義」を語り<sup>(13)</sup>、フランスの評論家ダニエル・サルナージュは「読書は逃げだという言い方は、間違いであり、正しくもある。なぜなら、ひとはたしかに世界から逃げ出すが、世界を去るためではなく、世界に戻るためなのだ」と述べ<sup>(14)</sup>、読書を通じてもう一つの世界を覗き見るこ

---

(11) アルベルト・マンゲル『読書礼賛』野中邦子訳、白水社、2014年、26。

(12) アリストテレス『詩学』松本仁助・岡道男訳、岩波文庫、2019年。

(13) 村中李衣『読書療法から読みあいへ』教育出版、2003年、129。

(14) ダニエル・サルナージュ『死者への贈り物 ひとはなぜ本を読むか』菊地昌実・白井成雄訳、法政大学出版会、1993年、40。



とは、自分がいた世界を再確認・再構築するために必要な作業であると語る。本が提供する逃避は、「いま・ここ」でよりよく生きるための手がかりを得る作業であり、現実を一方的に否定するためではない。

ブーツ・ライブラリーは、この読書ならではの逃避を物理的にも精神的にも実現化した場所だった。家を出て、開架式の棚に並べられている本を眺め、居心地のよい喫茶室で選んだ本を手にする時空間で、会員の婦女たちは単なる娯楽を超えた何かを確実につかみ取っていたはずだ。「軽い」と皮肉られたライト・フィクションであっても、こうしたジャンルだからこそ描ける問題があり、読者に何かしらの知恵や手がかりを与えていただろう。例えば、会員たちに人気があったファミリー・ストーリーの小説には、当時タブー視されていたような家庭の問題が実にさりげなく取り上げられていた。夫の暴力や子どもの反抗などの問題を、世間体を気にするあまりに、ひとには打ち明けられない会員にとっては、ファミリー・ストーリーは実用的な書物であり、啓発書でもあったのだ。彼女たちはただ逃避するだけでなく、本を媒介にして個人的な問題に立ち向かい、描かれた登場人物たちの苦悩や生きざまに勇気づけられ、家庭に戻っていたのではないだろうか。

ペンギン・ブックスのペーパー・バックが大量性・廉価性の時代をもたらすと、1950年代頃から貸本屋業界は継続の危機に立たされた。最後まで奮闘していたブーツ・ライブラリーも多くの会員たちに惜しまれながら遂に1966年に閉業した。行き場を失った女性たちは、その後こころの居場所をどこに見つけたのだろうか。